

ケニア赤十字社地域保健強化事業での活動を終えて

国際医療救援部

国際救援係長 喜田たろう

私は 2016 年 4 月から 6 か月間、東アフリカのケニア共和国に駐在し、日本赤十字社が 2007 年から支援しているケニア赤十字社の地域保健強化事業（Integrated Health Outreach Project、以下 IHOP）の事業管理を担当しました。

一般的には酷暑のイメージがあるアフリカ大陸ですが、ケニアの首都ナイロビは標高 1700 メートルの高地に位置しているため、一年で最も寒い時期にあたる 7 月には、夜間になると部屋のストーブをつけて毛布にくるまって過ごしていました。

事業地のガルバチューラ県は、同国の北東部に位置していて、広大な半乾燥地帯が広がる人口約 43,000 人の地域です。住民の多くは牛やヤギ、ラクダを飼育することによって生計を立てており、近年の気候変動の影響により深刻化している干ばつによって、食糧不足に陥ることも稀ではありません。



IHOP の事業地、ケニア共和国ガルバチューラ県。（写真右）水場からポリタンクに入れた水を運ぶ少年

また同県の属しているイシオロ州は、新生児及び乳幼児死亡率が国内でも最も高い地域のひとつで、主な保健問題としては、栄養失調、保健医療施設へのアクセス、家族計画への理解の低さ、医療従事者の介助のない出産、低い予防接種率、女性性器切除、予防可能な病気にかかる 5 歳未満児が多いことなどが挙げられます。

IHOP では、住民の中から地域保健ボランティアを育成して、住民を対象とした健康教育や対話集会を開催することにより、地域住民の健康に対する知識や意識を向上し、住民自身が自らの健康を守れるようなシステムを作り上げようとしています。



IHOP の巡回診療では、ケニア赤十字社のスタッフやボランティアが、県立病院の職員とともに保健医療施設が整備されていない村々を巡回する。

事業地ガルバチュウラ県のコンボラ村に住むチュクリサ・ローバさん（30 才）は、6 児の母親です。双子を身ごもって 7 ヶ月目のある日、下腹部に出血を伴う激しい腹痛に襲われました。ローバさんの相談を受けた IHOP の地域保健ボランティアは、妊娠中の出血を伴う腹痛が非常に危険な兆候であり、設備や人員の整った医療施設への緊急搬送が必要であると判断しました。

彼女が住むコンボラ村には医療施設がなく、この地域では救急搬送のシステムも整っていません。ボランティアからの連絡を受けたケニア赤十字社の IHOP チームは、急いで車両を手配し、村から 150 k m 離れた病院まで搬送しました。

彼女は病院の救急外来で無事に双子を出産し、2 ヶ月後には元気に育った子供たちを連れて、夫や家族の待つコンボラ村まで帰ることができました。

「命を落とししかけたあの恐ろしい経験を忘れることができません。」IHOP の巡回診療を利用して予防接種を済ませた子供たちの傍で、ローバさんは「赤十字は、ガルバチュウラのような恵まれない地域で、人々に寄り添い、命を救い続けています。日赤とケニア赤十字社には感謝してもしきれません。」と語りました。

彼女は今、IHOP の地域保健ボランティアとして活躍しています。IHOP の研修で学んだ

知識や技術を用いて、村人に対する保健教育活動を行い、地域の保健状態の改善に重要な役割を果たしています。

2016年10月末をもって、日赤はケニアへの要員派遣を中止し、長らく東アフリカ地域の拠点であったナイロビ事務所を閉鎖しました。

IHOPでは事業開始以来、ケニア赤十字社の能力強化をその活動目標のひとつに位置づけ、事業管理に関する技術的助言や関連職員への研修機会の提供を続けてきました。それらの努力が実を結び、ケニア赤十字社はアフリカ地域を代表する最も強力な赤十字社のひとつに成長しています。

日赤の支援は2017年12月で終了し、その後は同国保健省に活動が引き継がれる予定になっていますが、事業終了後も、これまでに培われてきた赤十字ボランティアの知識や技術、また彼らのネットワークが維持できるように、生計支援活動や青少年赤十字の設立など、赤十字の基盤強化を目指した活動が、ケニア赤十字社の主導で継続されていきます。

ガルバチャーラ県住民の健康への意識がさらに高まり、持続的で良質な保健医療サービスが地域に根づくことを、遠いアジアの果てから祈りたいと思います。



(写真左) 県内 17 か所の小中学校に開設された青少年赤十字クラブ、(写真右) 事業地の子供たち